

すると、あにはからんや、話に聞く妖怪、四面に白布を廻し、旗杭に人間の血の滴る生首をもち上げて待っていたのである。

俠気のこの人物、少しも恐れることなく、腰の脇差を引き抜き、怪物の胴体めがけて土ぎわ三寸上を切り付けたのである。すると、今までの生首は煙のごとく消去り、後には何もなかった。某氏は、これで怪物を退治したと意気揚揚と家路を急いだ。天王様（八雲神社）のところまで来たときであった。大きな牛が数匹道路一ぱいにねころんでいたのである。

某氏は、これも妖怪の仕業とばかり、意を決して、脇差を引きぬきぎま土ぎわ三寸上を切り払えば、「七月十五日を待つがよい。必らずこの怨をはらしてやる」と呻き声とともに、いい残して、今までの牛の姿は消え失せたのである。某氏はうす気味わるくなり、急いで家に帰り、それからしばらくの間、妖怪の怨念を晴らさんと神に祈願をかけていた。

ある日、ゆううつな気分をはらそうと、雷神山の麓、大ケ窪池に雑魚すくいに行つたのである。そこには、年端もゆかぬ童が一人池に入って雑魚すくいをしていた。

某氏は、着物がぬれると思ひ、童のそばに行き裾を上げてやつたところ、尻のところの数個の目が怨をこめらんらんと光つ



未子五郎内